



## 公開レクチャー記念インタビュー

### 企業競争に勝つ、発明の活かし方

技術マネジメント **大神正道先生**

\_\_\_先生のご専門はどのような分野ですか？

技術マネジメント、あるいはイノベーション・マネジメントという分野です。自然界における生物が環境の変化に適応しなければ生存できないように、企業も環境変化に適応する必要があります。技術マネジメントという分野は、企業が、環境変化のひとつ、技術的な変化にどのように対処して生き残っていくのかを研究する分野です。

\_\_\_先生のご研究は技術マネジメントという分野にどのように貢献しているのですか？

私は、板ガラス成形技術の発展過程について分析してきました。分析を進めるなかで、技術がその理論的な到達点に向かって進歩するのではない、と思うようになりました。

\_\_\_技術が理論通りに進歩するわけではない、ということですか？

そうです、ビジネスの世界における技術の伸展が理論に従うのではなく、むしろ開発参加者たちが共有する、ある種の思い込みによって伸展していく可能性を示唆しました。環境要因だと思われていた技術的な変化を企業がみずからコントロールできるかもしれないことを意味します。つまり、企業による技術マネジメントが上手いか下手かでその生存が左右されることとなります。

\_\_\_なるほど、そういった研究テーマを選んだきっかけは何でしたか？

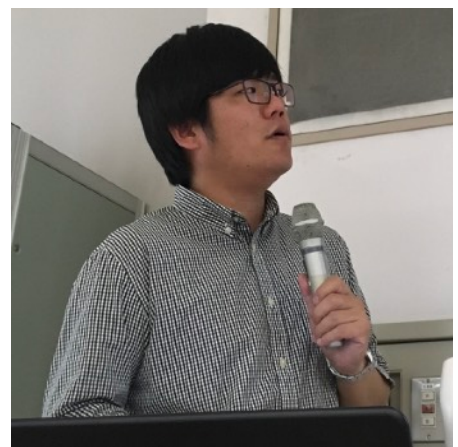
私は、良い技術を作りさえすれば、企業は利益をあげることができると漠然と考えていました。しかし、新しい技術を生み出すだけではそれは単なる「発明」に終わってしまいます。つまり新しい発明さえあれば企業の成功が約束されたも同然、というわけにはいかないことに気づきました。そこで、発明としての技術をどのようにビジネスに結びつけるかを探る、イノベーション・マネジメントという分野に関心を持ちました。

\_\_\_\_ところで先生のご担当科目は「イノベーション・マネジメント」と「生産管理」ですね、それぞれどんなことを勉強するのでしょうか？

まず「イノベーション・マネジメント」では、イノベーションの発生過程やそのパターン、企業の競争力に与える影響、企業がどのようにマネジメントしていけばよいかといったことを考えます。一方の「生産管理」では、日本の「ものづくり」の現場が、世界での競争に勝ち残るためにどのようなことを実践しているのかという視点で授業を行っています。

\_\_\_\_それらの授業で特に心がけていることはありますか？

「技術」や「生産」という言葉があると、いわゆる理系の学生に関係のあることで、文系の自分には関係のない学問だと思うかもしれません。たしかに、技術そのものの開発や研究については工学・理学などの専門家に任せるしかないでしょう。しかし、ビジネスの歴史は技術的に優れたものを生み出した企業が必ずしも生き残っているわけではないことを語ってくれます。技術の専門家が開発に集中するためには、組織の効率的な運用が必要ですからね。



\_\_\_\_なるほど、企業が技術をどう使うかが大事だということですね。

はい。そもそも技術を普及させるためには戦略的な視点が欠かせません。そして技術を使って儲けるための仕組みを作るためには社会科学的な、つまり文系的な視点が必要になります。技術も戦略もそれぞれ一方だけでは不十分なのです。技術と戦略は両輪であり、一体となって機能するという点を強調しながら授業を行っています。

\_\_\_\_では最後に、高校生の皆さんに向けてメッセージをお願いします。

大学受験までの問題は、正解がひとつしか存在しないように作られています。しかし、現実の問題には正解がひとつだとは限りません。さらには、問題そのものが間違えているということ、そもそも追究してはならなかったことに時間を割いてしまうこともあります。名市大経済学部に入学なさったら、是非とも、経済学的・経営学的なものの見方を学ぶことで考える力の基礎を築き、主体的に問題を発見・解決できるような人材になってほしいと思っています。